

< 研究成果の紹介 >

甘ガキ生産におけるの経営安定のための作期拡大技術**～ 不織布等の被覆資材を利用した「前川次郎」の抑制栽培～**

農業研究部園芸グループ・地域経営グループ

1. 成果の内容

カキ生産においては、収穫最盛期の出荷が集中し、価格の低迷を引き起こすとともに、収穫労力が不足しているため収穫期間の拡大が課題となっています。そこで、静岡県、岐阜県との共同研究により、本県の主要品種「前川次郎」を供試して被覆資材を使った保温管理による成熟抑制技術を開発しました。

一般に、カキは秋の気温が高いと着色が遅れ、収穫期が遅くなると言われています。着色開始期（満開後100～120日）から果実、葉を含めた枝を不織布（光透過率60～70%）で被覆することにより、被覆内の晴天時の日中気温は露地より2～4℃上昇し、これによって慣行栽培に比べ着色の進行（図1）や、果肉硬度の低下が抑制されるとともに、果実の軟化が減少しました（図2）。収穫日は露地栽培の収穫盛期より7～14日遅らせることができます。被覆により果実肥大が促進されますが、糖度への影響はあ

りません。不織布は光透過率60～70%のものを用いましたが、同等の光透過率と保温効果があれば白色寒紗等も使用できます。なお、処理の場合、一カ所あたりの被覆規模を大きくした方が、被覆および除去時の作業効率は良くなります。

さらにビニルハウスを用いて、着色開始期（満開後100～120日）から天井およびサイドをビニルで被覆し、日中気温を25～30℃に管理すれば、高単価が得られる年末需要期の出荷が可能になります。

2. 技術の適用効果と適用範囲

県下各地で利用できる技術であり、労力と作期の分散を図ることができます。

3. 普及・利用上の問題点

ビニルハウスを利用して保温する場合、35℃以上の高温になると果実肥大が著しく抑制される可能性が高いので温度管理には注意が必要です。

（前園芸グループ 西川 豊）

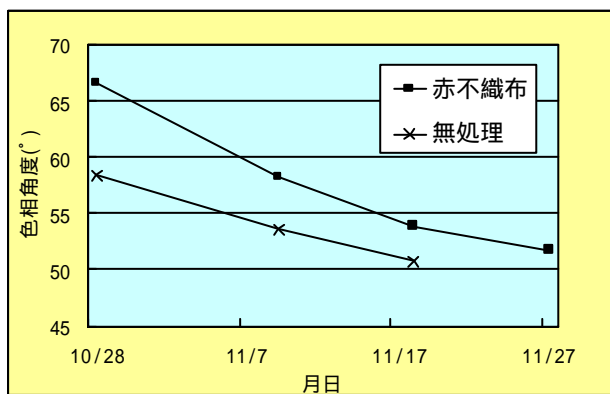


図1 不織布の被覆が果実の着色に及ぼす影響

（色相角度が0に近いほど赤い）

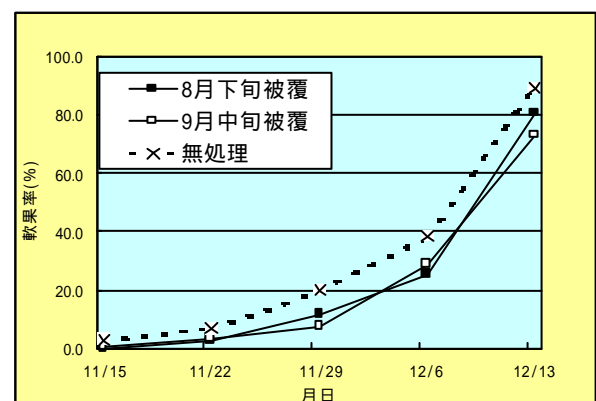


図2 不織布の被覆が果実軟化に及ぼす影響